

た。しかし、ワカメス1頭あたりでは、オトナオスと未成熟オスの比は回数で同じくらいで、相手数では10%有意水準ながらオトナオスのほうが多かった。オトナオスのうちでは、中順位のオスとのマウントイベントが多かった。

(2) ワカメスは、発情時にはオトナオスには積極的に近接を維持する傾向がみられたが未成熟オスに対しては積極的でなかった。

(3) 発情時におけるオスへのリップスマッキング、プレゼンティングの頻度はオトナメスより高かった。

(4) オスからの求愛行動：オトナオスではワカメスに対する慰撫的リップスマッキングがみられたが、未成熟オスは慰撫行動なしにワカメスに接近してマウントイベントをおこなっていた。

これらの結果から以下の考察が導かれる。ワカモノ期のメスは、オトナメスとくらべ相対的に未成熟オスとの性交渉が多いが、未成熟オスはワカメスの主要なパートナーとはいえない。メスの積極性をみても、ニホンザルのメスは性成熟初期からオトナオスへのプリファレンスを持っていると考えられる。ワカメスで相対的に未成熟オスとの性交渉が多いのは次のような理由によるのだろう。すなわち、サバンナヒヒで指摘されているようにワカメスは社会的技術が未発達で、オトナオスへのおそれを克服し適切に交尾を完遂することができない。その一方でワカメスはオトナメスより性的アクティビティが高い。そのため、かわりに年齢も近く近づきやすい未成熟オスを受け入れてしまうことが多いのだと考えられる。

今後は、実際の交尾相手を決定する要因としてオス側のプリファレンスを考慮した分析が必要である。

自由：16

日本文化史における猿猴図の類型と変遷の研究 —猿猴図データベースを基礎として—

都守淳夫（犬山市・愛知）

書画骨董類の売立目録に掲載された図版類は、日本文化史上に途上する猿類の説話や寓話の書誌学的研究の傍証資料ともなる。22法人機関の所蔵する延べ16000余冊の売立目録の実見から3777種の冊子を特定し全国所在目録としていま公刊中であるが、その中に筆者は1800件の猿猴図を検索し

6500枚の写真資料化を完了した。現在、主題別、時代別、作家別等による図像の類型化と変遷の分析に着手したところである。その中で、江戸期の城郭をかざった「猿猴捉月図」の意外な変遷の側面が判明したので報告する。

名古屋城上洛殿（1634年家光上洛時の宿舎として増築）の上段の間北入側の杉戸に狩野探幽（1602-74）により、2頭の牧溪様手長猿が枝より連なり湖面の月を取ろうとする捉月図が描かれていた（焼失）。それは君主のあるべき姿を諭す諷戒性の高い捉月図であった。ところで、江戸城の天保十年度（1839）の西の丸と、弘化二年度（1845）の本丸の御造営時の杉戸下絵の中に「岩に猿猴図」がある。いずれの絵柄にも折れた柏の流木にのる牧谿様手長猿が水をかき回し、岩上の猿がこの方を指差している。杉戸の位置はともに表大広間入側（上段北）であるから、松の廊下がこれにつづく。下絵群にはこれと別に、枝に連なる手長猿の「捉月図」の絵柄を含む九尺二枚建杉戸があるが、この建具の取付場所は不明とされている。

ところが流木にのる猿と、枝より連なり水月を取ろうとする数頭の猿が一つの屏風画面に描かれた作品が、この度の売立目録図版から「探幽：松鶴月猿猴六枚折屏風」、「常信：柳猿猴浪小禽屏風」、さらに「常信：墨画屏風」として発見された。このことから、位置不明の捉月図杉戸がその間取り寸法や画風から表大広間入側に関係づけられ、さらにこの屏風絵柄が狩野派模写本群に発見されれば、捉月故事の猿たちは枝が折れ水面に落ちてもお、折れた枝にのり「撈月」に動しむパロディーの主人公として、表上段北入側に登場していたことになる。これが、万治二年度（1659）御造営当時の同場所の探幽筆「岩猿猴図」まで遡行できれば、名古屋城上洛殿の捉月図とは対照的な解釈がすでにこの時期に成立していたこととなる。ちなみに1927年11月、パリの日本画オークションに出品された流出本「英氏画苑」（英一蝶：1652 - 1724）に、5頭の手長猿が折れた柏の枝にのり、棹をさし舵をとり天月に腕をのぼし水面を撈する図柄があったことも、この度判明した。